

### ■復元のプロセスと目的

私は縄文時代の遺跡から出土したかごの復元に2012年から本間一恵さんと共に関わった。それぞれ別の復元かごを製作、下宅部遺跡の復元かごでは協力して製作した。復元は先史時代の植物利用についての研究の一環として行われたもの。出土した編組品の遺物は保存処理、記録を経て詳細な組織構造の実測図が作られ、素材の植物が同定される。遺物を復元する場合は、素材の用量を見積り、その植物が生育する場所を探して採取、乾燥を経て復元実験場に運んで水に浸け、必要なら加工を行う。これらの工程を研究者らが担った。

彼らが見守る中、我々製作者は実測図を見ながら編むことになる。実測図からは判断がつかない時は研究者と相談しながら進めた。復元実験の目的は、まずは遺物のかごを立体にすること、そして復元によって判明した編み技術の機能や植物についての情報などが成果となる。実験の終了後、完成した復元品は教育目的などに使われ博物館などで第二の人生が始まる。

製作者にとっては復元実験の限られた時間内に仕事を完了しなければならない、納得がいくまでやり直す時間が取れることは少ない。今まで使ったことのない素材で製作することもあるが、逆によく知っている素材なのに、遺物と同じピッチ（組織密度）で編めないことの方が多い。その場合は採取された植物素材が遺物と同じ性質でないか、特別な加工方法が必要だったのか、または製作者の技量の問題なのか、疑問が残る。遺物とまったく同じ物を作るのは不可能だが、より近い物を目指すことは求められる。しかし同じにできなかった、という事実も重要な実験結果となる。ただ、製作者としては、考えたことや試したい改善案があり、もう一度作りたいという気持ちが強く残る。学術的な価値はないが消えてしまうのは惜しく、この紙面に書き残したい。

### ■東名遺跡

佐賀県の東名遺跡は700点を越えるかごが出土していて、縄文時代の植物利用を知る重要な遺跡の一つである。イヌビワ、ムクロジのへぎ材の大型かご2点の他、合計5点を復元製作した。さまざまな素材を扱ってきた経験があっても、イヌビワ、ムクロジのへぎ材は初めてであった。遺跡には大型かごと同じようなかごが多数発見されている。編み方に違いはあるが、概ね胴体が丸く膨らんだ形である。ドングリを入れ、水の中に浸けて保存するかごと推測された。たくさんどんぐりをいれたかったのだろう、丸い膨らみを出すために底のタテ材だけでなく、別のタテ材を底の周囲にたくさん差し込んで増やしている。当時の道具の状況から長い材が取れないと考えられたが、なんとか、多くのどんぐりを保存したいという東名縄文人の気持ちが伝わる。

私が製作したムクロジ材のかごは、胴の編み目が波形のパターンになっていた。丸く膨らんだ形を達成するために毎段タテ材を足すのでタテ材の本数が毎段変わることになる。それでも編み目の流れがスムーズである遺物に敬服した。その後、別の復元でも同じ状況で編むことになり、自分の考え方が柔軟になっていった。毎段ごとに編み目の流れを見て判断すればいいと、縄文人から教えてもらったということだ。



□発掘された日本列島 2014 展の東名遺跡のコーナー。後ろに復元したイヌビワの大型かごとツツラフジのかご、前列右側にその元となった遺物が展示された。(江戸東京博物館)



□イヌビワ 雌木  
クワ科。実はイチジクに似て食べられる。復元に使われた木が雄木か雌木かは不明。



遺物と同じピッチで編むことで気づくことが多い。同遺跡小型かごの復元の場合は、技量の差というよりは遺物に使われた素材が薄くて柔軟な良質の材である可能性があると考えた。時間をかけて質の良い素材を探し、丁寧に加工して編まれたかごは美しかったに違いない。タテヨコ材とも同じなのでパターンは目立たないが、研究者の中から違う色材を使えばパターンが鮮明になる、という意見が出ていたのを覚えている。「織の世界とバスケットリー」で展示したのは、復元の後、残った材でもう1個作ったもの。十年を超えて、全体の色や形が変わってきている。

東名遺跡の出土かごには様式化する前の実験的な編み方の変化を探るような痕跡があり新鮮であった。ヒップバスケットのようなツヅラフジの出土かごもそのようなかごである。中央に菱形のパターンが出ていて、その両端には縦方向の波形の編み目が並ぶ。両側にマチがあり、そこに集中して足されたタテ材の流れが美しく見えた。立体の形に展開される編み目の並びや流れを注意深く見極めて編んでいくクリエイティブな仕事に思えた。このかごの縁には皮付きの材と白っぽい材でもじり編みした箇所がある。復元実験では皮を剥いたが、それほど白というほどではない。

### ■下宅部遺跡／鳥浜貝塚／三内丸山遺跡

下宅部遺跡の出土かごの復元は東村山で行われ、数日通うことになった。研究者が調整したアズマネザサ材を使い、タテ材3本ずつ上下し、毎段ごとに1本ずつずれていく組織方法で編んだ。タテ材は内側が表、ヨコ材は皮側が表になっている。現在も同様の使い方はあるが、ササ類の場合、材の表が曲面なので、上記のような編み方だと凹凸感のある組織構造となり、組織の隙間も開いていく。(左下の写真を参照下さい。どちらも表側から撮影。上がタテ材の内側が表面に、下がタテヨコ材とも表側。)

去年11月に福井県で鳥浜貝塚から出土したかごの遺物を見た。部分的に残った組織だったが、その後ばらばらに。幸い、底と上部の組織の関係がわかる出土後の状態を記した実測図があり、それを見てアズマネザサで製作した。

ササ類の場合は加工ができれば、組織密度が遺物と合わないということはない。問題は他にある。細くて薄い材のため、タテ材が中央に寄りタテ材どうしが重なってしまうのだ。下宅部も鳥浜も遺物はタテヨコ材ともに幅が細い。組織によっては薄く細いタテ材どうしが重なり、かごの周囲が縮んでしまう。下宅部の出土かごの場合は、別の編み方の力を借りてダイナミックに形を変えているが、鳥浜貝塚のかごは上下でタテ材1本分の間隔が開いているだけ、それでもタテ材の間隔を広げるには工夫が必要だった。この点でも作り手の技量が関係するのかもしれないと思い、近所のアズマネザサを相手に練習を重ねてきたが、加工はできてもタテ材とヨコ材の厚みのバランスを掴むまでにはもう少しかかりそうである。鳥浜貝塚のこのかごのハイライトは編み目の方向が意識的であること、さらにその上に違う色のヨコ材を入れてパターンを編んでいる点である。今のところ、その材が染められたのかわからない。ウルシ製品も見つかってはいるがそれほど頻度で使われたことはないという。色材については今後の研究テーマになることを願っている。



□東名遺跡 ムクロジ材小型かご  
2012年3月に復元した後、製作したもの。高さ27cm。下は同遺跡のツヅラフジの復元かごの縁。



□下宅部(しもやけべ)遺跡の復元かご(2015)  
右は最初に作った試作。これも復元実験の一環である。材が厚いのでかごも硬い。左がその後製作した復元かご、高さが40cm余り。かごの組織面は柔らかい。





鳥浜貝塚のかごを見た時、北アメリカ先住民が作る Arundinaria 属（アズマザサ属）のかごを思い出した。アズマネザサの属とは違うが、同様に細い竹で口はぎができる。river cane と呼ばれ、かごのほか、マットや楽器などに利用する。特筆すべきはルイジアナ南東部に住む部族、Chitimacha 族が作る二重構造のかごだ。斜めに組む複雑なパターンを出したかごだが、材をクルミなどの植物で染めている。このタイプのかごは今も作られているそうだが、以前に作られたかごの方が組織の緻密さ、完成度の高さでは上だ。古いかごでは本に掲載した写真で見られるが、節と節の間の材を使うのか表面に節が無い。日本にも色材を使うかごがあるが、斜めに組む複雑なパターンにおいてはこのかごを超えるものではないだろう。



□鳥浜貝塚出土かごの試作 上の色材はクルミで染めた。底から編みまで 12 cm。縁は残っていないため、タテ材を残している。



復元実験に加わったことで、復元かごの講習を担当する機会が増えた。先日も三内丸山遺跡の縄文ポシェットを作る講習の際、遺物に近いかごを作りたいという希望があり、久しぶりに作ったのが右下の写真のかご。

三内丸山遺跡の縄文ポシェット（2013.6）の復元ではヒノキ科の青森ヒバの内皮が使われ、樹皮の立体作品を製作する吉田雅子さんが加わった。小さなかごであったが、復元で使った内皮は薄く腰がなかったため、編むのに苦労した。完成したが遺物より大きく、縁の始末に納得ができなかった。

□Chitimacha 族のバスケットメーカーが製作した二重構造のかご。オレゴン州の Maryhill Museum で。今回使ったのはシダー内皮、同じヒノキ科の Thuja plicata である。内皮は

厚みがあるが水につけると柔らかくなる。このような組織構造の場合、隙間の無い組織を作るためには、タテ材にテンションをかけて緩みを与えないように編んでいくのだが、今回はそれが可能になった。

縄文ポシェットは波形のパターンを出しているが、途中から波形が出る位置を変えている。縄文時代のかごであろうと、人の行為を辿って現代の我々と共通点を見出すことができるのが面白い。一見簡単そうに見えるかごだが、やってみるとむずかしい。前述の講習は紙バンドで行ったが、波形の位置を変えるのは、ハードルが高いと思われた。

かごを作る講習で、かごってこんなにむずかしいものだったのですね、という反応をよく聞く。多くの人にとって、かごは簡単にできるものというイメージがあるようだが、実際は素材の準備から始まって、材の数を揃えたり、作る途中も編み目の間隔に気を使うばかりか、新しい材を継いだり折れた材を補修したりしなければならない。また、編み目でパターンを出すためにはタテ材の総数からパターンを予想する必要があるのだが、当時、その定式を持っていたと考えられる。かご作りが計画的な仕事であることは体験してみないとわからない。我々のように将来のために目的を定め、準備して遂行する力が縄文人にもあるようだ。

世界中に先史時代から続く様々なかごがあり、いろいろな植物や他の素材が使われている。一見、多様な世界でも、バスケットリー的な眼で見れば、時間、文化の違いを越えた別の価値観を見出せるし、複雑に見える組織構造ですら、その世界を分類法という武器でシンプルに見ることができるのは楽しい。

2008 年に出版された How twisted fibres helped to shape the world で Karen Hardy は縄を作る行為が人間どうしの社会構築に繋がったと書いた。もしかしたら、かご作りの工程を考えることで、将来を予想し、そのための手段やプロセスを考える力を得られるようになったと考える研究者がいるかもしれない。



□シダー内皮の縄文ポシェット。高さ 12 cm

- 東名遺跡：文部科学省 東名遺跡 (YouTube)、書籍：「縄文の奇跡！東名遺跡」雄山閣
- 下宅部遺跡：東村山市 :<https://www.city.higashimurayama.tokyo.jp/tanoshimi/rekishi/shimoyakebe/index.html>
- 鳥浜遺跡：若狭歴史博物館 60 周年記念特別展図録 「森と出会った縄文人」
- 三内丸山遺跡：<https://sannaimaruyama.pref.aomori.jp/>
- 植物利用：書籍：「さらにわかった！縄文人の植物利用」新泉社、web：かご・アイデアの器：バスケットリー、編む植物図鑑 <http://basketry.lovetop.jp/pages/material.html>